

中国の市場経済体制変革期における 相互扶助体系調査 (第2報) 金銭・物質的扶助の主体変化

劉 彩 鳳, 長 嶋 俊 介*

(奈良女子大学大学院人間文化研究科, * 奈良女子大学生活環境学部)

原稿受付平成 12 年 9 月 4 日; 原稿受理平成 13 年 7 月 23 日

The System of Mutual Assistance and Support during the Epochal Change of Economic and Marketing System in China (Part 2)

Shifts of Monetary and Material Support

Caifeng LIU and Shunsuke NAGASHIMA*

Graduate School of Human Culture, Nara Women's University, Nara 630-8506

** Faculty of Human Life and Environment, Nara Women's University, Nara 630-8506*

This study discusses how the aspects of monetary and material supports in the mutual assistance and support systems shifted in China at the time of drastic change of economic and marketing systems. We conducted questionnaire research in 1998, trying to portray the difference before and after the change. The analytical methods as well as our conclusions are described below.

1) Patriarchal "jia" system: It appears that the traditional value of filial duty has been revived, centering around the tripartite pillars of Parents, Children, and Brothers not living together.

2) Stronger blood ties: Monetary and material help rather than moral assistance seemed to have increased, strengthening blood ties centering around Parents, Children and Brothers not living together.

3) In terms of work classification, strong correspondence was noted only for monetary matters.

4) Females as a whole seemed more dependent; their relations with friends seemed to have undergone some change so far as the subject matter is concerned.

5) Social status: Those in higher hierarchies seemed more advantageous. Those in lower hierarchies seemed less advantageous, but they were receiving more assistance from friends.

6) Financial status: Work environment seemed to have worsened even for those in higher hierarchies. Noteworthy was the deterioration of work environment for middle class females and low class males.

(Received September 4, 2000; Accepted in revised form July 23, 2001)

Keywords: system of mutual assistance and supports 相互扶助体系, life planning 生活設計, monetary and material help 金銭・物質的扶助, patriarchal system 家父長制.

1. 緒 言

本報では、相互扶助内容のうち、精神的扶助に関する論稿(第1報)に続き、金銭・物質的扶助に関する扶助供給主体の推移について、調査・文献考察をもとに論じる。金銭・物質的扶助については、歴史的には、「家(jia)」制度(それは世帯を同一にするものによる自助に属する家庭的自助と世帯を別にする者による

準家庭的互助からなる)を核として、地縁(近隣等の互助に属する相互的互助)、友縁(原則として共助に属する互惠的互助)、職縁(ギルドの相互的互助)等の縁により確保されたものであったとされている。「家(jia)」,つまりそれは伝統的社会における血縁関係者のみを主とする大家族制的な生活保障システムで、(1)労力的奉仕、(2)金銭・物質的(物品・土地・その

表 1. 金銭・物質的扶助主体の実態 (平均値)

	親	子	きょうだい	親戚	友人	近隣	職場	社区	市場	政府	ボランティア
変革前	2.12	1.76	1.66	1.43	1.46	1.13	1.20	1.02	1.01	1.02	1.01
順位群	I	II	II	III	III	IV	IV	V	V	V	V
変革後	1.90	1.90	1.64	1.41	1.50	1.11	1.13	1.02	1.01	1.02	1.01
順位群	I	I	II	IV	III	V	V	VI	VI	VI	VI
得点差	-0.22	+0.14	-0.02	-0.02	+0.04	-0.02	-0.07	0.00	0.00	0.00	0.00

「ほとんどない」1点, 「時々ある」2点, 「よくある」3点とし, 点数化したものである。

他) 贈与又は貸与, (3) 自己または他人の商売や取引等仕事上の便宜(無利息・低金利や機会の提供)等に関する機能を果たしていたものである。なかでも O・ラングは中国における血縁間の相互扶助の強さ等を「家族主義」と規定し, 社会的・企業的な「保険は全然なく, 中国伝統社会は法律でも習慣でも, 親戚及び同族間の相互扶助を強く要求し」¹⁾, 「親に対する子の義務は親の子に対する義務よりも遙かに強く強調されている」²⁾等として「家父長制」でも特に「孝」を尊び, その意味でも集権・老後保障的な性格が強かったことを指摘している。同国建国後, イデオロギー的指導や統制もあり, これらの家父長制的構造の一部に崩壊現象が始まるが, 都市部でこれを補ったのが, 主として, いわば社会保障代行となる職場内福祉である「鉄飯碗」の制度化である。社会主義社会の発展により, 金銭・物質的な生活を相対的に安定化させるべく機能してきたが, 「家(jia)」以外の縁間の扶助関係は, 一方では依然として強く保持され, それも生活の安定化を支えてきた。次いで惹起した市場経済体制への変革が, さらにその生活構造変革に強いインパクトを与えた。今回の調査目的は, その具体的・定量的な推移データを収集し, 分析することにある。その家政学的データと分析的知見は同国の相互扶助・支援行動とその主体形成並びにその機能のあり方について再点検し, 社会展望を開く上でも重要な基礎資料となるものである。

2. 研究方法と目的及び研究状況

(1) 研究方法・調査の概要(第1報と同じ)

(2) 研究状況

金銭・物質的扶助に関する研究は, 社会主義国家建設以来となると研究が極めて乏しい。特に都市部の住民については収入が相対的に多く, 教育的にも恵まれ, 就職, 食料・住宅等の配給, 医療, 年金, 福利厚生等

の(つまり鉄飯碗の)有利条件を当然として宣伝するのみで, これらに関する具体的・定量的な調査研究は(調査・公表上の行政制約もあってか)殆ど見あたらない^{*1}。あるとしても主に新中国建国前の旧中国のギルドや農村社会における社会学的研究に限られていた^{*2}。

3. 結果及び考察

(1) 金銭・物質的扶助の実態と変化に関する結果の概要

金銭・物質的扶助とは, 生活上の一時的困難に対する金銭・物質的なやりとりのことである。それらには金銭・物質的借入, 被贈与, 物々交換等も含まれる。その扶助供与主体としては自助, 互助, 共助, 公助に属する11主体を設定した。(以下の表においては, 例外を除き有意な差が認められたものに限り掲げた。)

表1から分かるように変革前(即ち92年以前)では, 扶助程度の大きかったのが別居する親(以下「親」とする)(2.12), 同子(同「子」)(1.76), 同きょうだい(1.66), 友人(1.46), 親戚(1.43), 職場(1.20), 近隣(1.13)の順となっている。これらを分類すると, 第Iグループとして親が突出し, 第IIとして子・きょうだい, 第IIIとして友人・親戚, 第IVとして職場・近隣, 第Vが残りのグループであった。子による義務を主とする従来型とは異なり, 親・子・きょうだいという近親者の扶助関係の強さとしての「家族主義」という単位と内容で, 生活を相互に保障

^{*1} 1952年から27年間の空白時代を経て, 79年に社会学的研究の公的復活の後, 雷潔瓊を中心とする「中国婚姻家庭研究会」により, 82~83年に北京・天津・上海・南京・成都の調査が行われたが, 都市部に関する相互扶助部分は見あたらなかった。

^{*2} 清水盛光, 仁井田陞, 牧野 巽, 福武 直らの農村社会に関する研究, 根岸 佶, 仁井田陞らのギルドに関する研究である。

中国の市場経済体制変革期における相互扶助体系調査（第2報）

表2. 金銭・物質的扶助主体の変化—変革前後別における職業形態別の差違（構成比）—

		現在の職業						χ^2 値	p
		国営 (62.5%)	民間 (12.5%)	合併 (5.7%)	中小 (4.6%)	自営業 (7.1%)	無職等 (7.6%)		
変革前	きょうだい	65.7%	9.7%	3.6%	4.7%	10.6%	5.7%	25.3	***
	友人	56.8	14.0	8.4	7.3	7.9	5.6	29.5	***
	近隣	58.5	16.9	0.8	9.2	6.9	7.7	15.3	**
変革後	きょうだい	62.8	10.5	4.0	5.2	10.1	7.4	15.3	**
	親戚	55.8	16.5	7.1	6.4	7.9	6.4	18.6	**
	友人	56.4	14.3	8.5	7.0	8.5	5.2	36.8	***
	近隣	60.9	12.2	0.0	11.3	8.7	7.0	20.1	**
	職場	71.2	11.0	2.1	6.2	2.1	7.5	13.5	*

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$.

する機能（ここでは準家庭的互助）が確として存続していると言える。そして、変革後（98年8月調査時点まで）では、子が伝統型にもどる勢いで上昇したことを除いて、被扶助総体では減少したものの、依然として親（1.90）、子（1.90）、きょうだい（1.64）が重い。次いで友人（1.50）、親戚（1.41）、職場（1.13）、近隣（1.11）という順序自体は変革前とほぼ同じ構造となっている。つまり変革後を段階別に分類すると、第Ⅰグループが親・子同程度、第Ⅱとしてきょうだい、第Ⅲとして友人、第Ⅳとして親戚、第Ⅴとして職場・近隣とつづき、第Ⅵが残りのグループである。今でも近親者（直系血縁者）への極めて強い期待・依存傾向が見られ、「家（jia）」意識の残存的影響は否定できないものと思われる（今回過去に遡った調査であったため、子の加齢に伴う責任の増大と親からの支援減少効果も一部には効いている）。そして親戚・近隣・きょうだいの減少及び友人の増加は変革後の変化である。とりわけ友人と親戚との乖離が一気に広がった（ただし精神的扶助での友人の位置付けの方がさらに重い）。その扶助程度で見ると、金銭・物質的な扶助では、親・子・きょうだい（準家庭的互助）の3扶助主体（精神では、親・子・友人の3扶助主体）を中心の柱としてやりとりしていることが分かった。金銭・物質的という世知辛さ（主として「交換」性原理が重く存在する）は、それほど重く人間諸関係を縛るので、互助性や血縁性というまさに紐帯的結合を引き出してくる。

一方現実における人間諸関係等の扶助対応力・資源形成等においては、それらに十分対応できないことも考えられる。市場化によって、さらに教育費や住宅の

商品化等を伴い、それが家計を新たに恒常的に圧迫する要素となってくるとされる。直系血縁間における生活保障機能のみでは十分にカバーできないものとするれば、それへの生活設計的対応がこれからの普及課題となる。また職場・近隣等の「相互的互助」の変化も、このような状況、及び社会的・文化的変化の中での構造変革（民主的な地域マネジメント課題）として受け止める必要が出てくる。

(2) 属性による金銭・物質的扶助の変化

1) 職業形態別による変化

職場環境の激変に伴う動向を、現在の職場形態別でみた。表2以下の項目で統計的な有意差の見られるものは（以下同じ）改革前では、きょうだい・近隣・友人で、改革後では、それがそのままに職場と親戚が加わっている。それだけ扶助主体の独自・多様な機能の幅が増してきたことになる。その内容を見ると、自営業では、両時期共にきょうだいが大きな意味を持ち、業務的特質がそのまま出ている。また変革前の民間・中小における近隣も同様で、さらに合併・中小において友人が相対的に重い関わりを示している。変革後では、国営での職場に対する依存度が大きく、親戚・友人が低い。これは官僚制的慣行の残滓とも見られる傾向である。中小では今度は近隣が強くなっており、顧客や関係者も金銭・物質的扶助主体として関わっている。これもまさにアジア的特徴とも思われる側面が表に出てきている。

職業形態別における前後の変化を表3に示す。国営でのみ子の位置付けの変化が見られる。特に第一順位への大幅移動は注目される。国営という比較的恵まれ

表3. 金銭・物質的扶助の変化—職業形態別における前後の差違 (平均値)—

扶助主体	職業形態						
	国営			合併	自営業	無職等	
	親	子	職場	親	職場	親	親戚
変革前	2.16	1.68	1.22	1.94	1.21	2.15	1.47
変革後	1.91	1.96	1.15	1.81	1.03	1.85	1.30
<i>p</i>	***	***	***	*	**	**	*

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$.

表4. 金銭・物質的扶助の変化—国営における性別の前後の差違 (平均値)—

	男性			女性			
	親	子	職場	親	子	友人	職場
変革前	2.16	1.68	1.23	2.16	1.68	1.40	1.22
変革後	1.88	1.96	1.16	1.94	1.96	1.47	1.15
<i>p</i>	***	***	***	**	***	*	**

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$.

表5. 金銭・物質的扶助の変化—前後別における男女の差違 (平均値)—

変革前	社区 平均値	市場 平均値	変革後	社区 平均値	市場 平均値	ボランティア 平均値
女性	1.03 (0.190)	1.02 (0.136)	女性	1.03 (0.186)	1.02 (0.146)	1.03 (0.170)
男性	1.01 (0.105)	1.00 (0.056)	男性	1.01 (0.119)	1.00 (0.069)	1.00 (0.089)
<i>t</i>	-2.33*	-2.13*	<i>t</i>	-2.46*	-2.66**	-2.24*

() 内は標準偏差. * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$.

た階層で、金銭・物質的面に限るとはいえ、「考」の復活とも見られるほどの比重のシフトは十分に注目に値する。そして先述の職場依存は、相対的で、さらに依存度を下げているが、自営業での職場の減少ほどではない。市場経済的制度の変革そのものの激変はより後者に及んでいる。無職等では、血縁的支援ですらも劣り、条件不利者にさらに厳しい現実が示されていることが分かった。

表4では、これに対し性別での前後の差をとってみた。注目すべきことは国営のみで有意差が見られたことである。女性では男性の3項目に加え、友人項目がやや増加として加わっている。変革前、男女同一であった親への依存は、変革後に女性でやや多い依存傾向として見られた。なお子に関しては、男女とも同一値

となっている。

2) 性別による変化

変革前後における男女の差違を表5に示す。精神的扶助での有意差のある依存主体幅の広さに比べて、著しく少なくなっている。それだけ対応が純化もしくは特化しているとも言えよう。男女共に有意な差が存在するのが準公助に属する社区、自助に属する市場で、女性側でやや高依存となっている。変革後のボランティアでも男女差がある。女性側のリストラ失業の多さと生活の担い手としての現実の厳しさを反映してのものか、女性側でやや多い。いずれももともと依存度の低い項目のみであることに着目すると、それだけ他では男女差が検証しがたいほど、平等な市場経済化の傾向が進みつつあるとも考えられる。

中国の市場経済体制変革期における相互扶助体系調査（第2報）

表6. 金銭・物質的扶助の変化—性別における前後の差違（平均値）—

	男性			女性			
	親	子	職場	親	子	友人	職場
変革前	2.08	1.75	1.20	2.18	1.79	1.45	1.20
変革後	1.87	1.97	1.13	1.95	2.02	1.50	1.12
<i>p</i>	***	***	***	***	***	*	***

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$.

表7. 金銭・物質的扶助主体の変化—前後別における社会的地位別の差違（構成比）—

		上 (9.6%)	中 (57.8%)	下 (32.6%)	χ^2 値	<i>p</i>
変革前	子	12.3%	52.5%	35.2%	7.5%	*
	友人	8.6	53.0	38.4	12.2	**
	社区	32.0	40.8	20.0	14.8	***
	市場	54.5	45.5	—	27.2	***
	政府	25.0	66.7	8.3	10.7	**
変革後	友人	8.2	51.8	40.0	22.7	***
	社区	26.9	57.7	15.4	10.6	**
	市場	41.2	58.8	—	23.5	***
	政府	33.3	54.2	12.5	7.2	***

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$.

表6では、性別で見た前後の差違をとった。全体的に女性は男性より1項目（友人）が多い。子と親への依存は常に女性側で多い。職場についてはほぼ男女同一減少である。女性のみにある友人の項目でやや増加となっている。以上を総合すると家計管理責任のあり方と関わる故か、女性の方が資源の調達度と幅が大きい。

3) 社会的地位別の変化

表7に示すように差が認められたのは、前後共通項目としても友人・社区・市場・政府と多い。友人については、前後共に下位者で強く現れており、注目したい。変革前のみとして子がある。上・下位にとってはより強い。つまり変革前においては伝統的「考」は安定的上位者と下位者に、より残っていたことになる。

社区・市場・政府では変革前後とも高地位者が高い依存を示し、変革後社区・市場への依存がやや減少し、政府では増加した。そして中位者の変革前の政府の重さ、下位者の致命的なほどの政府・市場における前後の低さにも注目したい。高地位者にとってどの資源でも有利な立場での利用とも見られる金銭・物質的側面

ではあるが、それでも変革後の友人からの依存は決して高くはない。

表8では、これを前後の変化で見た。上・中・下共通して親が減少している。中・下位者では子の増加、及び職場の減少も見られた。そして中位者では親戚もやや減少し、構造的変革はより中、そして下位者で起こっていることが分かった。つまり市場経済化政策の実施では社会的な高地位者への影響が少ない。

さらに表9を性別における前後の差違で見た。高地位者の変化が観察されない。中・下位者の間で起こっている詳細は、中位者で女性が男性より2主体多く、下位で男性が1主体多い。後者のそれは職場依存の大幅減少で、この市場構造変革が及ぼした地位の乏しい男性への影響の大きさを示している。女性の中位者の依存変化の項目の多さを見ると、子に対しては男性よりやや頼らず、親に対してはかなり頼っている傾向が見られた。男性に見られない職場・親戚はいずれも減少となっている。女性の下位では唯一子が異なった推移のあるものとして登場し、その依存度は高い。

表 8. 金銭・物質的扶助の変化—社会的地位別における前後の差違 (平均値)—

扶助主体	社会的地位							
	上		中			下		
	親	子	親	子	親戚 職場	親	子	職場
変革前	2.07	2.19	1.72	1.45	1.21	2.05	1.80	1.20
変革後	1.93	1.90	1.98	1.40	1.14	1.94	1.99	1.10
<i>p</i>	*	***	***	**	***	*	*	***

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$.

表 9. 金銭・物質的扶助の変化—性別における社会的地位別の前後の差違 (平均値)—

男性	中		下		女性	中		下	
	親	子	親	職場		親	子	親戚 職場	子
変革前	2.12	1.73	2.06	1.21	変革前	2.25	1.70	1.38	1.22
変革後	1.85	1.98	1.92	1.08	変革後	1.94	1.93	1.32	1.12
<i>p</i>	***	**	*	***	<i>p</i>	***	**	*	***

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$.

表 10. 金銭・物質的扶助主体の状況—前後別における経済的地位別の差違 (構成比)—

		上 (9.2%)	中 (56.8%)	下 (33.7%)	χ^2 値	<i>p</i>
変革前	友人	10.5	52.2	37.3	7.0	*
	社区	24.0	56.0	20.0	7.3	*
	市場	50.0	30.0	20.2	19.7	***
	政府	26.1	65.2	8.7	11.7	**
変革後	友人	11.3	50.2	38.5	17.8	***
	近隣	16.0	54.6	29.4	7.4	*
	社区	23.1	53.8	23.1	6.3	*
	市場	35.3	52.9	11.8	15.0	***
	政府	33.3	54.2	12.5	18.5	***

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$.

(3) 経済的地位別の変化

表 10 では、変革前後における経済的地位別の変化をとった。変革前 4 項目、変革後 5 項目（近隣追加）である。上位者での近隣比率の高さが目立つ。友人については、前後とも中位者が低い。社区・市場・政府については高地位者で、依存度が高いが、市場依存の独占的突出状態が変革後では、その突出状況が緩和している（中位者の依存の極度の低さから、程々の依存化へのシフトも見られる）。

表 11 では経済的地位別における前後の差違を見た。社会的地位（表 8）に比して、上位者では職場への低下、中位者では市場への依存度は微少であるが、それぞれ扶助主体に有意差のあるものが加わっている。職場への依存は上位者ほど変革前は高く、その後の減少度も大きい。中位者でのみ親戚が減少している。また上・中・下三者に共通する親では、上・中位者での依存度がもともと高いが、変革後上位者のみがまだ相対的依存傾向が高い。一方、中・下位のみで子が見られ

中国の市場経済体制変革期における相互扶助体系調査（第2報）

表 11. 金銭・物質的扶助の変化—経済的地位別における前後の差違（平均値）—

經濟的地位										
扶助主体	上		中					下		
	親	職場	親	子	親戚	職場	市場	親	子	職場
變革前	2.19	1.25	2.18	1.74	1.48	1.20	1.00	2.03	1.76	1.18
變革後	2.02	1.14	1.90	1.98	1.40	1.14	1.01	1.90	1.97	1.11
<i>p</i>	*	**	***	***	***	***	*	**	*	**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$.

表 12. 金銭・物質的扶助の変化—性別・経済的地位別における前後の差違（平均値）—

男性	上		中			下		女性	中				下
	親戚	職場	親	子	親戚	親	職場		親	子	親戚	職場	子
変革前	1.34	1.25	2.09	1.72	1.56	2.04	1.19	変革前	2.25	1.76	1.41	1.21	1.76
変革後	1.47	1.11	1.85	2.00	1.49	1.90	1.09	変革後	1.95	1.96	1.33	1.11	2.06
<i>p</i>	*	*	***	***	*	***	***	<i>p</i>	***	*	**	***	**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$.

ることから、O・ラングが指摘した事柄が変革後経済的中・下位者層で復活しつつあることを伺わせる。

これをさらに表 12 男女別で見ると、上位者については、男性側のみに有意差があり、内訳は親戚で増加、職場で減少となっている。経済的地位重視の意識での男系親族の結束が経済的成功と結びついた可能性を示すとしたら興味深い事実となる。中位の男女では、子・親・親戚とも同一の傾向であり、女性のみに見られる職場の減少は、中位の女性の職場環境の状況の厳しさを示しているとすれば気になるところである。下位者では、男女に違いがあり、女性は子のみの増である。男性は親・職場とも大幅な減少が生じており、男性の経済的下位者の職場環境の劣化は、より厳しい現実を示している。

4. まとめにかえて

本報では、中国の変革期における相互扶助体系の実態とその変化のうち金銭・物質的扶助について、総括的・具体的に分析した。精神的扶助では、準家庭的互助の別居親と同子、及び互惠的互助の友人を含めた3扶助主体を中心の柱としているのに対して、金銭・物質的扶助では、準家庭的互助の別居親・同子・同きょうだいを含めた3扶助主体を中心の柱とするものであったことが分かった。全体での傾向として、精神的

扶助及び金銭・物質的扶助が同一傾向で、やはり女性でより幅広い主体での変化が生じている。特に準家庭的互助である子、及び親への依存の多いことが示されていた。

職業形態別の結果では、国営で変化がやや多く、変革後有意な差を生じた主体に複数の追加がある。その対応も多様である。民間・合弁・中小では友人の存在が大きく、増加の傾向もある。自営業はきょうだいのみで、やや減少となっている。中小では変革後に近隣のみが頼りである。

社会的地位別では、変革前のみの傾向として、上・下位者にとっての子、下位者の友人が違いとして機能している。上位者では、変革前後とも相対的には社区・市場・政府への傾きが顕著であるが、政府についてのみ増加となっている。中位者で前後での差違が相対的に多いが、子以外で全て減少している。

経済的地位別においては、職場環境の悪化が上位者でも見られ、中位者の女性、下位者の男性にも重くのし掛かっている。また上位者の主体変化幅が広い。社区・市場・政府、さらに変革後では近隣も加わっている。しかし市場に関しては相対的に高水準で、変革後にその依存度が落ち、政府に対する依存が増加した。中・下位者での依存度は極端な低さが見られた。

以上明らかにされた結果は従来の血縁・地縁・ギル

ドを中心とされてきた生活保障機能が大幅に衰退・変化し、変革前後とも主として準家庭的互助の子・親・きょうだいの仕組みになっている。しかし、その前後でも差違は大きく、金銭・物質面では親・親戚・近隣・職場の減少が見られ、互恵的互助の友人が階層的な差違を内包しつつも、相対的に増加している。中国の金銭・物質面での生活保障機能は、今や転換期に直面しているが、単に市場化による条件変化のみではなく、今回の調査のように家族や人間諸関係、さらには地域・社会システムの条件を体系的に調査しなければ、方向性は見えてこないことが分かった。

引用文献

- 1) オルガ・ラング：『中国の家族と社会』，岩波現代叢書，岩波書店，東京，26-219 (1952)
- 2) オルガ・ラング：『中国の家族と社会』，岩波現代叢書，岩波書店，東京，31 (1952)

参考文献

- 1) 劉 彩鳳，長嶋俊介：中国の市場経済体制変革期における相互扶助体系調査（第1報）精神的扶助の主体変化，家政誌，**52**，811-818 (2001)
- 2) 劉 彩鳳，長嶋俊介：中国の市場経済体制変革期における相互扶助体系実態調査，日中社会学研究，第9号，40-60 (2001)

- 3) オルガ・ラング：『中国の家族と社会』，岩波現代叢書，岩波書店，東京 (1952)
- 4) 水島一也：『生活保障システムと生命保険産業』，千倉書房，東京 (1987)
- 5) 青井和夫：『中国の産業化と地域生活』，東京大学出版会，東京 (1996)
- 6) 若林敬子：『現代中国の人口問題と社会変動』，新曜社，東京 (1996)
- 7) 宇野重昭：『現代中国—静かな社会変動—』，岩波書店，東京 (1989)
- 8) 清水盛光：『支那家族の構造』，岩波書店，東京 (1942)
- 9) 清水盛光：『中国族産制度考』，岩波書店，東京 (1949)
- 10) 牧野 巽：『近世中国宗族研究』，日光書院 (1949)
- 11) 仁井田陞：『中国の社会とギルド』，岩波書店，東京 (1951)
- 12) 仁井田陞：『中国の農村家族』，東京大学出版会，東京 (1952)
- 13) 福武 直：『中国農村社会の構造』，大雅堂 (1946)
- 14) 根岸 佶：『中国のギルド』，日本評論新社 (1953)
- 15) 佐々木衛：『近代中国の社会と民衆文化』，東方書店 (1992)
- 16) 費 考通：『生育制度』，天津人民出版社 (1981)
- 17) 潘 允康：『家庭社会学』，重慶出版社 (1986)
- 18) 劉 英，薛 素珍：『中国婚姻家庭研究』，社会科学文献出版社，北京 (1987)
- 19) 陳 立行：『中国の都市空間とネットワーク』，国際書院 (1994)